

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 17 CONTENTS

About human bones from the Jomon period excavated
in Kagoshima Prefecture

Tatsumi Yubasakir

Introduction of excavated materials at
the Hoshizako site, Kajiki-cho, Aira City (1)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

Some consideration about of sue ware in the Middle Ages
in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Sin

Characteristics of Distylium racemoum and
excavated materials and folklor materials

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
5nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2024

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第17号

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について
—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸

令和5年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2024. 12

研究紀要

年報

縄文の森から

第17号

二〇二四

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第17号 目次

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳・・・・・・ 1

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・ 23

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真・・・・・・ 52

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸・・・・・・ 63

令和5年度年報・・・・・・ 77

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について —出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳

About human bones from the Jomon period excavated in Kagoshima Prefecture

Yubasaki Tatsumi

要旨

鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡と人骨の情報を集成し、各遺跡と縄文時代の人骨の概要をまとめた。

その結果、鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡は、17遺跡53体の人骨が出土しており、遺跡立地の内訳は、貝塚10、洞穴3、砂丘2、台地1、低湿地1となっている。時期別には、中期9体、後期32体、晩期8体、不明4体である。

その他、年齢層、男女別数、平均身長、抜歯の有無、外耳道骨腫、埋葬の形の集成及び検討を行い、鹿児島県内出土の縄文人骨の情報をまとめた。

キーワード 人骨、立地、時期、貝塚、後期、仰臥屈葬

1 はじめに

筆者は、上野原縄文の森に勤務しているが、来園者から縄文時代の人骨や貝塚などの質問に日々接している。

縄文時代の平均身長は男性160cm、女性150cm程度であるということや、市来貝塚などの主な出土遺跡を紹介しているが、具体的な詳細はあまり把握していない。

そこで、鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨を集成し、出土遺跡や人骨の概要をまとめ、今後の上野原縄文の森の運営等に活かしていきたいと考え、本稿をまとめることにした。なお、人骨の記載番号については、報告書・文献に報告ある番号を使用し、番号の最初に調査年を追記したものもある。

2 研究史

鹿児島県内の人骨の研究はそのほとんどが、各遺跡の報告の中で、人骨の形質人類学や形質的特徴を報告しているものである。その中で、他遺跡と比較検討しているものや、再検討しているものなどを記載したい。

長崎大学医学部内藤芳篤氏は、1961（昭和36）年に市来貝塚から出土した人骨3体（男性1・女性2）について、人類学的観察及び計測結果（推定身長や頭蓋・四肢骨計測値）から、九州島内他の縄文の人骨との比較を行い、市来貝塚出土人骨の特徴を述べている。市来縄文人骨は、長崎鼻縄文人骨とは異なる性質をもっているとして、九州や津雲、関東出土の縄文人骨との検討を行っている。①人骨全体の観察所見として、市来縄文人骨は縄文人共通の特徴をもっている。②頭型は、市来縄文人骨男性は、他の縄文人骨と同様に中頭型、女性は、他の縄文人骨より短頭型が強いとしている。③市来縄文人は、男性はかなり高身で、女性は他の縄文人と差はな

いとしている。④頭型・推定身長は、市来縄文人骨は長崎鼻縄文人骨とは異なり、他の九州縄文人と類似性が強く、南九州の弥生人の中では、甕島の里弥生人と近似して、他の弥生人とは異なっている。そのことから、市来貝塚出土の縄文人骨は、低身・短頭の南九州の縄文・弥生人の集団とは異なり、他の九州縄文人骨と類似性が高いと結論づけている（内藤1984）。

長崎大学医学部内藤芳篤氏・石田肇氏、鹿児島大学歯学部小片丘彦氏は、鹿児島県内の縄文時代・弥生時代・古墳時代とされる出土人骨の一覧とその保管場所をまとめている（内藤芳篤・石田肇・小片丘彦1984）（註1）。

金関丈夫氏は、一陣長崎鼻遺跡出土の昭和31（1956）年人骨において、風習的抜歯の可能性が指摘しており、さらに、下顎左中切歯に人為的水平研磨の可能性のあることを報告している（金関1958）。

中橋孝博氏は、一陣長崎鼻遺跡出土の昭和31（1956）年人骨を再計測し、詳細に分析している。考察の中で、一陣長崎鼻遺跡人骨と広田遺跡（弥生時代～古墳時代）で出土した人骨を比較し、一陣長崎鼻遺跡人骨は本州の同時期の縄文人とは、比較的類似性が確認できたが、同じ島の広田遺跡出土人骨との強い近縁性を窺える結果は出なかったとしている（中橋2011）。

前迫亮一氏は、鹿児島県内の縄文人骨や縄文墓制を集成しており、各時期の墓の可能性のある配石遺構や埋設土器、土坑のある遺跡や縄文時代の人骨が出土している遺跡の概要をまとめている。その中で、事例の中心が後期・晩期に集中しているのは、貝塚が増えることと、土器棺墓が増えることが要因としている。また、縄文時代の遺跡の多さと比較して、墓に関する資料が極めて少な

い状況を指摘しており、用途不明の土坑の規模や遺跡内のあり方から、土坑墓の可能性を考慮すべき事例を検討する必要性を述べている。(前掲2002・2008)。

大保秀樹氏は、九州中南部における縄文時代の人骨出土遺跡と埋葬の状況を集成して、出水貝塚出土人骨と比較(掘込・被覆礫・埋葬姿勢・頭位)を行っている。出水貝塚では、屈葬を主としながらも、埋葬姿勢や頭位はバラバラで、他の縄文時代人骨出土遺跡状況と比較すると統一性や規則性がないと述べている。また、特徴的な埋葬として、1953年人骨は、他遺跡の類例から、土器を頭に被せた可能性(いわゆる甕被り葬)や、被覆礫の出土から石を抱かせる抱石葬を行った可能性を指摘している(大保2020)。

藤尾慎一郎氏・木下尚子氏・坂本稔氏・瀧上舞氏・篠田謙一氏・神澤秀明氏・角田恒雄氏・竹中正巳氏は、出水貝塚の1954年人骨1～3号と、垂水市柘原貝塚の人骨の炭素14年代測定とミトコンドリアDNA分析を行っている。出水貝塚の人骨は、縄文時代後期で、北部九州の縄文人や弥生人がもつM7aLa系統に属することが判明している。柘原貝塚は、縄文時代後期で、ミトコンドリアDNAハプログループの系統は、M7aLaだが、現代人や古代人のいずれにも見られないもので、九州本土か琉球列島のどちらの系統を引くものかは判断できないとしている。奄美群島出土の縄文時代該当の人骨の分析も実施しており、伊仙町面縄貝塚の2013(平成25)年に調査された際にCトレンチV層出土の頭蓋骨は、縄文時代晩期末～弥生時代、天城町下原洞穴は、平成28(2016)年～令和元年(2019)年に行った際に出土した2号人骨は、縄文時代後期後半としている。ミトコンドリアDNAは、弥生時代前期相当の人骨であるトマチン遺跡の3体も合わせて行われており、徳之島の縄文時代相当期の集団は、基本的には琉球列島の集団の一部だったと判断している(藤尾・木下・坂本・瀧上・篠田・神澤・角田・竹中2021)。

2 鹿児島県の縄文時代該当人骨出土遺跡の概要

(1) 江内貝塚

出水市高尾野町に所在し、出水平野西北端、北東に八代湾、東に江内川と野田川の沖積低地を望む、舌状の小丘支丘の突端部北側斜面に位置している。

昭和36(1961)年に池水寛治氏及び出水高等学校考古学部により発掘調査が実施されている。

人骨は散乱が著しく個体数も明確でないようだが、把握された確実な3個体分の報告がされている(小片1965)。いずれも、図面等の報告はない。なお、埋葬施設とされる遺構は、大小礫を直径160cm程度に集積し、頂部に石棒を配した配石遺構と、大形礫を半円状に配した半環状配石遺構から構成されている。

① 1号人骨

半環状配石遺構の北側に位置し、仰臥伸展葬である。

老年期の男性で、虫歯で歯を生前になくしているようだが、抜歯はないとされている。骨の残存状況等は、不明である。

② 2号人骨

半環状配石遺構の北側に位置し、散乱して出土している。壮年期の女性で、虫歯が認められるが、抜歯はないとされている。変形性脊椎症が認められている。また、骨に傷創痕がある。骨の残存状況は不明である。

③ 3号人骨

散乱して出土している。壮年期終わりから熟年期の男性で、左大腿骨は生前に骨折して、仮関節があり、歩行はかなり困難であったとされている。

(2) 出水貝塚

出水市に所在し、米ノ津川左岸・大野原洪積台地の北側に舌状に飛び出した部分に形成された貝塚である。標高は、約22～23mで、貝塚北側は、米ノ津川の氾濫原であったが、現在は出水市総合運動公園となっている。人骨は1920(大正9)年に人骨破片11点、1953(昭和28)年に1体、1954(昭和29)年には4体、1997(平成9)年に下肢骨が残存した1体が出土している。

① 1920年人骨

大正9(1920)年8月、山崎五十麿氏の行った調査で人骨破片が4点確認され、長谷部言人氏が分析を行っている。同年12月、長谷部氏が企画した調査でも人骨破片7点が確認され、報告されている(長谷部1921)。

この時の人骨は詳しい出土状況は不明である。

② 1953人骨

昭和28(1953)年に河口貞徳氏他が実施した調査で、人骨が1体確認されている。調査の概要は『日本考古学年報』6(河口1963)に報告されているが、時期について河口は「阿高式に属するもの」と報告している。Iトレンチの貝層直下の赤土層より出土した。頭部を北西に向けた仰臥屈葬で、頭部付近に土器底部が、腰部付近から阿高式土器片が出土したことが分かった。四隅には自然礫が配置されていた。赤土層まで掘り込まれて、膝を立てた状態で埋葬された後、土圧で膝が右方向に倒れたとされる(鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

③ 昭和29(1954)年に山内清男氏の指導の下調査が実施され、1号から4号までの人骨が4体確認されている。

A 1954-1号人骨

Iトレンチ2区で、黒土層表面まで掘り込まれ赤土を被った状態で埋葬されていた。仰臥し下肢は折り曲げて立てた仰臥屈葬であった。頭部はS10°Wを向いている。実測図では腰部の右側に人頭大ないしそれより大きな石が置かれている(鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020)。

イ 1954-2号人骨

1954-1号人骨を出土したIトレンチ2'区を広げ3'区とした所から出土している。石に覆われ、赤土層に上の貝層から掘り込まれ、仰臥伸展姿勢で埋葬されていた。残存状況はあまり良くない。頭部はS24°Eを向き、人骨上部及び周辺には石塊が多数あり、被覆するような状況であった（鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020）。

ウ 1954-3号人骨

Iトレンチ7区で出土した。貝層下の赤土層に掘り込まれ埋葬されていた。1954-2号人骨と同層位で、周囲及び上部に礫を置いて全体を覆った状態であった。頭部はE30°Sを向いているが、頭骨以外残存状態が良くないため、埋葬形態は不明である（鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020）。

エ 1954-4号人骨

Iトレンチ6区で出土し、黒色土層を若干掘り下げて埋葬されていた。頭部はW10°Sを向き、大腿骨は肩の方向へ、膝は反対方向へ強く折り曲げられた仰臥屈葬である。頭骨の周囲に人頭大の礫が若干あり、大きな礫でしっかり被覆されている状況である（鹿児島県立埋蔵文化財調査センター2020）。

④ 1997人骨

平成8・9（1996・1997）年にかけて出水市教育委員会が調査したもので、1997年に22トレンチで出土した。攪乱土坑により上半身部分は失われ、腰骨以下の下肢骨が残存していた。大腿骨は肩の方向へ、膝は反対方向へ折り曲げられていることから仰臥屈葬と推定される。調査報告書（出水市教育委員会2000）の方位に誤りがあり、実際の頭部は北を向いていたと考えられている。掘り込みや被覆礫については不明である。調査報告書第2節では、人骨近くから南福寺式土器が出土したと記述されているが、第V章のまとめでは阿高式土器と説明している。なお、調査担当者への確認から、供伴する土器は南福寺式土器で、同時期の人骨の可能性が高いことを指摘している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2020）。

(3) 麦之浦貝塚

薩摩川内市の、肥薩おれんじ鉄道上川内駅から、北西側に約2.3km、薩摩川内市街地から北西側へ5.3kmとところに所在する。高城川の支流である麦之浦川の右岸に南方へ舌状に延びた標高約13m台地上に位置している。

貝塚は、台地の東側斜面部に3か所（第1～3）に確認されている。第3貝塚から縄文人骨1体と、散在人骨3体分が出土している。昭和58（1983）年に、川内市教育委員会により、本調査が実施されている。

① 縄文人骨

貝塚北側の第3貝塚から、3基の土坑墓が発見されており、1号土坑（墓坑）から人骨1体が出土している。

土坑は長軸116cm・短軸72cm・深さ31cmで、平面形はほぼ長方形を呈し、南頭位で人骨が出土している。周辺の遺物から縄文時代後期とされ、土坑の大きさから屈葬と推測している。縄文人骨は、壮年後期の女性とし、身長約140cm前後で、頭型は中頭に近い短頭型で全身形質はほぼ縄文人一般の特徴を示している。また、上顎右中切歯にエナメル質の破折があるほか、右上腕骨の肘頭窩に新たに新生された粗面が認められている。

② 散在人骨

縄文時代後期とされる3つの散在人骨が報告されている。散在人骨1は右橈骨で成人の男性。散在人骨2は右大腿骨で成人の男性。散在人骨3は左右脛骨で成人女性とされるものである。散在人骨2の右大腿骨には顕著な変形性膝関節症の痕跡が報告されている。

(4) 市来貝塚（川上貝塚）

いちき串木野市に所在し、旧市来町を流れる八房川中流域、河口から直線距離約3kmの左岸、標高12～13mの河岸段丘の上及び標高7～12mの斜面に位置している。市来貝塚の発掘調査は7回実施されている。発掘調査の経緯等は、『市来貝塚』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2023）に詳細に記載されており、参照していただきたい。本稿では、人骨出土の発掘調査のみを記載する。人骨の出土は、大正15（1926）年に2片、昭和36（1961）年に3体、平成2（1990）年に頭骨が出土している。平成6（1994）年に県の史跡に指定されている。

① 大正15（1926）人骨

大正15（1921）年、清野謙次氏・山崎五十磨氏により発掘調査が実施されており、貝層底部に近いところで、人骨は頸骨中央部1片と尺骨1本の出土が記録されている。後世による攪乱はないと考えられるが、他の部分の骨の出土はなかったようである。昭和5（1930）年に田幡丈夫氏により人骨の詳細が報告されているようだが、一次資料を確認できず不明である。

② 昭和36（1961）人骨（1号・2号・3号人骨）

昭和35（1960）年に盗掘事件が発生し、昭和36（1961）年に当時の市来町が調査主体者となり、発掘調査を実施している。調査総括は河口貞徳氏が担当しており、3月22日から31日までの10日間実施されている。A・B2本のトレンチを設定し、Aトレンチから2体（1号人骨・2号人骨）、Bトレンチから1体（3号人骨）が出土している。

ア 1号人骨

AトレンチⅧ区の5層（混土貝層下部）から検出された。東南方向に頭を向け、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。人骨の東側側面を中心に長さ30～50cmの礫が配されたように出土した。意識的に配石したものと考えられる。市来式土器期のもので、推定身長148.70cmの熟年女性と同定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター2023）。

イ 2号人骨

AトレンチⅥ区からⅨ区の3層下部から検出された。南向きの仰臥屈葬である。下肢附近で有孔の円形軽石製品が出土した。市来式土器期のもので、推定身長146.37cmの熟年女性と同定されている(鹿児島県立埋蔵文化財センター2023)。

ウ 3号人骨

BトレンチⅠ区の4層中(掘り込みと考えられる)で検出された。基盤をなす巨岩の陰に埋葬された状態であった。頭を南側に置いた仰臥伸展葬である。推定身長163.46cmの熟年男性とされる。

なお、3号人骨は伴ったとされる土器が「沈線文土器」で、指宿式土器期のものと報告されている(河口1988)。しかし、再検証の結果、伴った沈線文土器を特定できず、Bトレンチから出水式土器が圧倒的に出土していることから、出水式土器に伴う人骨の可能性が高いことを指摘している(鹿児島県立埋蔵文化財センター2023)。

③ 平成2(1990)年人骨

平成2年(1990)年に、当時の市来町が埋蔵文化財確認緊急調査事業として、遺跡の範囲確認を実施している。発掘調査は、鹿児島県教育委員会文化財課職員が行っている。1～15のトレンチ調査を行っており、遺跡東側の8トレンチの中世と近世の2時期に造成された痕跡の下層である混貝土層から人骨が出土している。頭骨がまとまって出土しており、埋葬人骨の可能性が高いと報告されている。時期は縄文時代後期とされ、トレンチ内土器は市来式土器の報告が多い。

- 1 人骨の所属年代は、考古学資料から縄文時代後期と考えられる。
- 2 残存していたのは同一個体の人骨片で、頭蓋の一部と肋骨片が残っていたにすぎない。
- 3 乳様突起は小さく、下顎体の諸径も小さいことから、女性と考えられる。
- 4 歯の咬耗、頭蓋縫合の所見から壮年期と推定される。
- 5 下顎の歯に、特殊磨耗が認められた。
(市来町教育委員会1991)

(5) 黒川洞穴

日置市吹上町永吉に位置し、永吉川の支流の二俣川の浸蝕によってできた、谷の北斜面に存在している。遺跡地付近は、凝灰岩またはシラス層からなり、80～100mの高さに断崖が形成されている。これらの断崖の基部に、水食によって洞穴が形成されている。黒川洞穴は、海岸部より6.5km、標高84mに大小2個の洞穴が隣接して開口している。西側の大洞穴(西洞穴)は、凝灰岩とシラス層からなり、入り口の幅は13.3m、高さは4.35m奥行きは深い落盤のため不明である。西洞穴に接して東側(東洞穴)に、入口幅11m、高さ4.35m、奥行8.4mの馬蹄形の小洞穴がある。この洞穴はシラス層に

形成され、天井中央には円筒形の浸蝕穴がある。西方90mに、元権現洞穴がある。標高79.5mに開口、入口幅21.65m、高さ21.65m、奥行き17mある。

昭和27(1952)年に坊野小学校教諭辻正徳氏の連絡で、河口貞徳氏が発掘調査し、縄文時代晩期の黒川式土器を発見している。

昭和39(1964)年、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会により、江坂輝弥氏・河口貞徳氏が11月18日から7日間、発掘を行っている。期間中に、新潟大学の小片保教授が埋葬遺構の調査に当たっている。次に昭和40(1965)年8月14日より7日間の発掘調査を行っている。これらは主に東洞穴の調査で、昭和42(1967)年7月29日より11日間、西洞穴の発掘を行っている。平成16(2004)年に県の史跡に指定されている。

3号土坑人骨

昭和39(1964)年の東洞穴調査時に、埋葬跡(3号土坑)が調査されている。3号土坑は東西径90cm(南北は不明)、深さ40cmである。人骨は熟年女性とされ、土圧を受けて、土坑床面に密着し、頭部を西方向に側臥屈葬されており、骨盤が洞部下に、尾椎骨は頭部の下に移動しているという特異な埋葬方法とされている。

(6) 草野貝塚

鹿児島市の南部のJR坂之上駅から五位野にかけて平坦に広がる標高30～50mの台地の一角に位置する。かつては、東側は急崖で海岸線が迫り7つの小島が点在し、西側と北側には開析された谷が形成されていた。現在は、東側は工業用地として埋め立てられ、西側・北側も造成されている。

昭和27(1952)年の河口貞徳氏の調査報告によって、草野貝塚の全容はほぼ明らかになっており、市来式と指宿式の層位の上下関係が判明し、また指宿式から市来式への型的推移を明確になり、以後の縄文後期土器研究の指標となっている。昭和56(1981)年には鹿児島市教育委員会が開発に伴う第1次、翌57年には第2次の緊急発掘調査を実施している。

人骨は、前頭骨片1点が出土している。年齢は壮年前期とされ、性別は女性の可能性が高いと報告されている。

縄文時代後期とされ、出土状況等は不明である。

(7) 上焼田遺跡

南さつま市金峰町に所在し、長さ約1.5km、最大幅約500mの宮崎台地の北端部、標高約15mの舌状台地北側傾斜面に位置している。小規模な貝塚が点在しており、周辺部は水田地帯で、県営圃場整備事業に伴い、昭和50(1975)年に、鹿児島県教育委員会が本調査(調査対象面積400㎡)を実施している。縄文時代晩期とされる人骨2体が確認されている。

① 土坑墓—1号人骨—

長径99cm, 短径62cm, 深さ19cmで, すり鉢状の楕円形である。人骨は, ほぼ完全な形で残存しており, 頭部が北西方向を向き, 手は両方とも肘関節を強く屈して胸部にあて, 足は股関節・膝関節を強く曲げ, 頭蓋・足とも左方向に倒れた側臥屈葬である。熟年の男性とされ, 推定身長はピアソン式150.52cm, 藤井式151.02cmである。

下顎の中切歯から第1小臼歯までの計8本に相応する歯がなく, 残存している歯や歯槽の状況から, 風習的抜歯が行われたと推定している。ただし, 上顎は残存してなく, 実際の抜歯の形は不明である。

② 2号人骨

貝殻や獣骨, 土器片等とともに, 散乱した人骨が140cm四方に散らばっていた。仙骨・腓骨・脛骨がひとかたまり, 上腕骨片が北, 東方向へ離れて出土する状況と報告されている。

(8) 大渡遺跡

指宿市に所在し, 指宿枕崎線の指宿駅と山川駅の間地点で鉄道と国道269号が交差して, 陸橋を形成する西側にあたる標高50m前後の台地に位置している。昭和28(1953)年に国分直一氏が試掘調査を行い, その際に, 指宿高等学校の先生や生徒も調査に参加している。指宿市誌編纂の一環として, 昭和32(1957)年に国分直一氏・河口貞徳氏・河野治雄氏・重久十郎氏等とともに2次にわたるトレンチ調査が実施されている。4つのトレンチを設定して, 調査されている。第一トレンチと第三トレンチから人骨が出土している。

① 第一トレンチ

第1トレンチからは2体の人骨が出土しており, 埋葬人骨としている。トレンチの1Bから出土を一号人骨, 4Bから出土を二号人骨としている。

ア 第一号人骨

頭蓋骨と脛骨, 腓骨のみである。頭部は西側に埋葬され, 頭部上部及び脚部付近には石皿の破片が出土している。胴部付近にも, 平たい板状の石が記録されている。頭部直上にはさらに, 獣骨や魚の背骨, 土器片が出土している。脚部V字状になって出土していることから, 屈葬でないかと推定している。土坑墓等の掘り込みの記載はないが, 状況から埋葬人骨と判断している。

イ 第二号人骨

頭部を北に向けられており, 顔はうつむきかげんで南に向けられている。特異な点として, 人骨が置かれた状態が傾斜面に沿うように, 頭部と脚部では30cm程度の高低差が記載されている。保存状況は悪いようで, 遺構もないと判断されている。

② 第三トレンチ

第12層から人骨とみられるものが出土している。西壁面には2個の頭蓋骨が確認されている。10層以下から市来式土器・指宿式土器の出土が確認されている。

(9) 前田遺跡

始良市街地の北西側, 平野部の端に位置し, 遺跡のすぐ北側には住吉池があり, 遺跡南側の別府川へと流れている。地形が谷状となっている低湿地部から縄文時代中期後半(約4,500~5,000年前)の土坑72基と, 堅果類や編組製品・加工木などの植物質遺物が出土している。中期該当層(IV層)から, 人の指の骨が出土しており, 骨になった後に火を受けていると報告されている。

(10) 柘原貝塚

大隅半島の垂水市にあり, マンロー氏が大正3(1914)年に, 大隅肝属地区のクノギハラ近くで貝を発見したとされている。遺跡は市街地から南東側に約5km離れた, 台地間の扇状地状に広がる沖積平野と海岸線の間にある標高約7mの小微高地上に立地している。遺跡周辺には約1.6kmにわたって遺跡が広範囲に所在する柘原遺跡群として知られており, 現在は, 海岸線から約300mほど離れている。個人住宅の建設に伴って, 垂水市教育委員会が平成7年度に確認調査で土坑墓2基と, それに伴う人骨2体, 平成9年度・10年度には垂水市教育委員会が農免農道整備事業に伴う本調査を実施し, 土坑墓2基と, それに伴う人骨2体, さらに保存状態が不良の人骨2体が確認されている(註2)。また, 遺跡の範囲確認調査が平成12(2000)~14(2002)年に実施され, 人骨1体が確認されている。

① 1号土坑墓(1995-1号人骨)

土坑墓は, 長径100cm, 短径78cm, 深さ20cmで楕円形を呈している。土坑は北西端に人骨(頭蓋骨・下顎骨一部・歯)が出土している。男性の可能性があり, 年齢は壮年としている。上加世田式土器期の土坑墓とされている。

② 2号土坑墓(1995-2号人骨)

長径160cm・短径95cm・深さ30cmで, 頭部が北西方向を向く, ほぼ完全な状態の左右の膝と股関節を強く曲げた仰臥屈葬人骨が出土している。壮年の男性とされ, 左右外耳道に外耳道骨腫が認められ, 上下顎4本の抜歯が確認されている。推定身長はピアソン式163.7cm, 藤井式161.2cmである。上加世田式土器期の土坑墓・人骨とされている。

③ 1997-1号人骨

保存状態は不良で, 頭蓋と体肢骨の破片が残るだけで, 骨の形態はほとんど不明とされる。性別不明で, 壮年前半とみられ, 抜歯は確認されてない。

④ 3号土坑墓(1997-2号人骨)

長径150cm・短径80cm・深さ20cmの楕円形を呈している。ほぼ全身の人骨が残っている。人骨の出土状況は, 右の体側を下にした側臥で, 肘・股・膝を半ば屈曲した状態で出土している。性別は女性, 年齢は壮年前半と推定されている。上顎左右犬歯が抜歯されている。推定身長は149.5cmである。縄文時代後期末~晩期初頭と

され、黒色磨研土器（三万田式・御領式）と推定している（註3）。

⑤ 4号土坑墓（1997-3号人骨）

長径約150cm・短径約80cm・深さ約20cmの楕円形を呈している。ほぼ全身の人骨が残っている。人骨の出土状況は、仰臥屈葬である。性別は男性で、年齢は壮年初期（20歳～21歳）で、抜歯はない。下顎骨に3か所の治癒骨折痕が報告されている。推定身長は161.0cmである。縄文時代後期の市来式土器の時期とされている（註4）。

⑥ 2002-1号人骨

27トレンチから出土しており、頭蓋骨のみで、保存状態は余りよくないとされる。上顎の犬歯は存在しており、風習的な抜歯は行われなかった可能性が高いとしている。外耳道骨腫が左右の外耳道に認められている。縄文時代後期の市来式土器がトレンチ内から出土しており、概ね市来式土器の時期としている。

(11) 大泊貝塚

肝属郡南大隅町に所在し、貝塚のある大泊湾は大隅海峡に面している。湾奥から南側にかけて砂丘が発達し、その南側一角に貝塚が形成されている。

昭和28年（1953年）国分直一氏が発掘調査を行い、縄文時代後期の貝塚として知られている。昭和57年（1982年）に鹿児島県教育委員会が実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査で、現状の確認を行っている。貝塚を伴う遺跡は外之浦を結ぶ県道に沿い、南側の砂丘、北は大泊集落の後背地まで広範囲に及んでいることが判明している。

人骨は、昭和28（1953）年の調査時に出土しており、表土から81cmの層に、南から北に伸展したと考えられる下肢・胸骨の一部が発見されている。胸骨の上方には、20cmの砂層を挟んで、74×25×10cmの石が出土しており、埋葬した上で胸部に石をのせたものと推定されている。

(12) 一陣長崎鼻遺跡

種子島の南部に位置する南種子町に位置する。遺跡は、種子島南部、太平洋側の海岸砂丘上に立地する貝塚遺跡である。人骨は、昭和31（1956）年に1体、平成21（2009）年に頭蓋骨5片が出土している。

① 昭和31（1956）年人骨

昭和29（1954）年に地元の川添憲枝氏により、出土品が駐在所に報告されている。その後、分布調査が盛園尚孝氏により実施されている。8月には、盛園氏・三友国五郎氏によって試掘調査が実施され、縄文時代晩期の黒川式土器期の貝塚であることが判明している。昭和31（1956）年に露出している人骨を川枝氏が採集し、盛園氏に人骨の出土地点を案内している。その際に記録に、出土状況については、地表より1.5メートル位の深さのところから出土したらしい（盛園1956）。

手は前でくみ、あしを曲げて埋まっていたということから、恐らく屈葬であることは間違いないと思う（盛園1968）、と報告している。また、骨の特徴については、成人男性で上顎左側中切歯に人為的抜歯が認められ、かつ下顎左側中切歯に、人為的な水平研磨が認められることが指摘されている（金関1958）。この人骨は、現在、九州大学に保管されている。以上の報告から、地表から1.5m下層で、屈葬位で埋葬された人骨で、周辺からは獣骨や貝製品、黒川式土器が出土していることから、縄文時代晩期（黒川式土器期）のものと考えられる。

なお、昭和31（1956）年人骨は、南種子町教育委員会2011で再検証されている。それによると、全体的に頑丈で恥骨、大坐骨切痕等の骨盤形態から男性で、歯の嚙耗の程度が強いことなどから、熟年、もしくは老年（60歳以上）達した高年齢と報告している。推定身長は、2つ示されており、162.1cmと160.4cmで、当時としては高身長であったことを指摘している。また、風習的な抜歯の可能性が指摘されていたが（金関1958）、抜歯の風習は、上顎の側切歯と犬歯を対象とした抜歯が多く確認されており、一陣長崎遺跡出土人骨の上顎左の中切歯を対象とした類例がないことから、事故などの非意図的な要因で脱落する可能性もあることを指摘している。さらに、下顎左中切歯に人為的水平研磨の可能性が報告されているが（金関1958・盛園1968）、再検証では明確な確認ができなかったことを報告している。

② 平成21（2009）年人骨

平成21年調査は、2つの調査区を設定している。貝塚南端の遺跡の範囲を確認する第1調査区から、人骨が出土している。出土した人骨は、乳幼児の頭蓋骨片と成人の頭蓋骨片で、貝・獣魚骨などの自然遺物と混在して、いずれもⅡ層（暗褐色砂層）から出土している。この調査により、黒川式土器の単純期の貝塚であることが、再確認されている。

・乳幼児の頭蓋骨

頭蓋骨5片が出土しており、最大のものは5cm程度の破片のようである。最大のものは、遺構に伴う可能性があったため、検出した段階で精査・サブトレンチでの調査を実施しているが、明瞭なプランは確認されていない。

頭蓋骨片は同一個体の可能性が高く、骨の厚さから乳幼児の脳頭蓋片で、性別不明と報告されている。

・成人の頭蓋骨片

2.5cm程度の頭蓋骨片が1片出土している。脳頭蓋の一部で、縫合が含まれており、骨の厚さから成人に達しており、性別は不明と報告されている。

(13) 下山田Ⅱ遺跡

奄美市笠利町所在し、海岸から内陸へ300mほど入った砂丘に形成されている。昭和59（1984）年新奄美空港建設に伴って実施された発掘調査で、人骨4点と遊離

歯1本が出土している。いずれも嘉徳系土器を伴っていたことから、縄文時代後期とされている。

① 下顎骨A

ほぼ完全な形の下顎骨である。壮年の女性とされ、下顎両側中切歯がなく抜歯と推定されている。なお、遊離歯1本は、この下顎骨Aと同一個体とされている。

② 下顎骨B

下顎体だけ残存する。壮年の男性とされる。

③ 上腕骨

左上腕骨の約15cmのみが残存している。成人の女性とされている。

④ 大腿骨

右大腿骨の約18cmのみが残存している。成人の男性とされている。

(14) 長浜金久遺跡

奄美市笠利町に位置し、地形は後背地標高15m～50mの丘陵の前面に砂丘が発達している。砂丘は南北に長く形成されている。その距離は約1kmになる。標高は約13mである。鹿児島県教育委員会が発掘調査を昭和58(1983)年1月に第1次調査、同年10月に第2次調査、昭和59(1984)年4月から7月まで第3次調査を実施しており、昭和58年の調査時に人骨が3体発掘されている。そのうち1体が縄文時代のものでされているが、形質人類学的には、弥生時代以降の可能性も指摘されている。

① 2号人骨

散乱状態で発掘されており、頭蓋骨のごく一部と、下顎骨の右半分が残存していた。性別は女性の可能性があり、壮年と推定されている。縄文時代とされているが、詳細は不明である。

(15) 下原洞穴遺跡

大島郡天城町にあり、海岸から約500m内陸に位置し、開口部は標高約90m、幅約27m、高さ1～5mで西に向かって開口している。洞穴前面には、直径約60mの陥没ドリーネが広がる。平成28(2016)年に、先史時代人骨の発見を目的として、天城町教育委員会と鹿児島女子短期大学と共同での学術調査が実施されている。その後、平成29(2017)年～平成30(2018)年に、天城町教育委員会が主体となり鹿児島女子短期大学の協力を得て、発掘調査を実施している。縄文時代後期(貝塚時代前3期)頃の墓跡2基が発掘されている。墓跡ごとに人骨の概要を記載する。

① 1トレンチ墓跡02

洞窟奥壁に接するように石灰岩礫をコ字状に配置し、内部にいくつかの石を配置し、その上部に人骨が治められている。墓域スペースがあり、左右の下腿骨が解剖学的位置関係をほぼ保ったままの状態出土しており、1次葬を想定している。奥壁側に散乱状態の人骨があり、2次葬の際に奥壁側に押し込まれたとされている。焼か

れた人骨と焼かれていない人骨が存在している。焼かれた人骨は白骨化した骨を焼いたものとされている。貝製小玉やゴカイ類棲管製首飾り2個などが出土している。

少なくとも成人3体分の人骨が報告されている。

② 2トレンチ墓跡01

2トレンチ範囲内に2体の人骨が発掘されている。2体とも、腰・臀部から下の下半身は解剖学的位置保っている。洞穴奥壁側を1号人骨、入口側を2号人骨としている。トレンチ内からは、ハリセンボン頸骨加工の首飾り2個や貝玉、面縄前庭式土器などが出土している。2体とは別に少なくとも性別不明成人3体、未成人1体とされる人骨が散乱状態で出土している。焼かれた人骨と焼かれていない人骨が存在している。焼かれた人骨は白骨化した骨を焼いたものとされている。遺構などの堀込は確認できなかったが、人骨の出土状況から、土坑墓もしくは、遺体に土をかける形の埋葬を想定している。

ア 1号人骨

伸展葬である壮年の女性で、上半身は埋葬後(白骨化後)に改めて人為的に動かされた可能性を指摘している。

イ 2号人骨

伸展葬で壮年の男性で、上半身は埋葬後(白骨化後)に改めて人為的に動かされた可能性を指摘している。

(16) 中甫洞穴

大島郡知名町にある。ドリーネの1つで、標高約100mで、森林に覆われた径約70mの窪地であり、南東と北西の2か所に地下の鍾乳洞に通じる洞穴が開口しており、規模の大きい北西側の洞穴が中甫洞穴である。知名町教育委員会は中甫洞穴の重要性から、昭和58(1983)年に国や県の補助を受け、第二次の発掘調査を実施しており、その際に縄文時代及び縄文時代以降とされる人骨2体が発掘されている。本稿では、縄文時代とされる1体のみを記載する。

1983年1号人骨

土坑は隅丸の三角形で、頭位を南東方向にむけ、顔面や折り曲げた手足を東向きにした横臥屈葬の人骨1体が埋葬されていた。土坑主軸両端に各3個と2個の石灰岩礫が人骨を挟むような形で検出され、意図的に配置したものと考えられる。人骨は、後頭骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。壮年の女性とされ、外耳道骨腫は両側とも認められない。推定身長値は、ピアソン式147.08cm、藤井式142.48cmと推定されている。抜歯は認められていない。縄文時代とされ詳細な時期は不明である。

(17) 神野貝塚

沖永良部島知名町大津勘の太平洋に面した臨海砂丘地に立地している。昭和57(1982)年に沖縄国際大学、昭和58(1983)年沖縄国際大学と鹿児島大学が発掘調査を行っている。鹿児島大学が調査を行ったCトレンチ

から人骨が出土している。

神野貝塚出土人骨

直径1mの範囲に散乱した状態で出土しており、破片は60個以上とされている。破片の大きさは最大径8cm、小さなものでは1cm程度あり、四肢骨片と思われる1個を除き、すべて頭蓋骨破片と報告されている。一定程度接合・復元できており、その特徴から壮年の男性の可能性が高いとされ、外耳道骨腫は見られない。縄文時代後期に相当する層から出土しており、後期の可能性が高い。

3 集成のまとめ

鹿児島県内の縄文時代人骨出土遺跡は、17遺跡53の人骨が出土している。遺跡立地の内訳は、貝塚10、洞穴3、砂丘2、台地1、低湿地1となっている。人骨が残りやすい貝塚が多い。

時期別には、中期9体、後期32体、晩期8体、不明4体である。後期が全体の60%と占めている。従来から後期の貝塚数が多いのが要因と考えられている。鹿児島県の貝塚数は、鹿児島県埋蔵文化財情報データベースによると縄文時代とされる貝塚は46遺跡、そのうち時期の記載があるものが31遺跡、時期の内訳は早期3、前期6、中期2、後期15、晩期5である。全体の48%が後期の貝塚となっている。後期に属する貝塚の発掘調査が多く実施され、併せて貝塚の規模が比較的大きく、人骨の残りやすい条件を備えていることが、出土人骨が多いことに結びついていると考えられる。

ここからは、性別や年齢、平均身長、埋葬の形などを考察したい。

性別は男性18体、女性17体、不明18体である。埋葬における男女別の区別については、特に見当たらない。

年齢層は、表1のようになっている。

表1

	男性	女性	性別不明
老年	1	—	—
熟年	3	4	—
壮年	8	10	1
成人	3	2	7
未成人	—	—	1
乳幼児	—	—	1
年齢不明	3	1	8

骨の残存では、全身骨格に近い物が14体報告されている。そこから、鹿児島県の縄文時代の平均身長は、ピアソン式から算出されたものを主に使用して計算すると男性158.04cm、女性145.82cmである。抜歯は男性2体、女性2体で見られ、抜歯なしと判断されている人骨は12体である。その他は、歯そのものがない場合が多く不明である。

素潜り等によるとされる外耳道骨腫は垂水市の柘原貝

塚の3体のみが報告されている。

埋葬の形は、表2のようになる。

表2

	時期			
	中期	後期	晩期	不明
伸展葬	0	3	—	—
仰臥伸展葬	1	1	—	—
屈葬	—	2	1	—
仰臥屈葬	4	4	2	—
側臥屈葬	—	—	1	—
横臥屈葬	—	—	—	1

一般的に縄文時代は屈葬が主とされているが、今回の集成でも75%は屈葬である。仰臥（仰向け）か、側臥・横位に関しては、分類できる報告では仰臥12体、側臥・横位2体で、86%が仰臥となっている。時期で偏りがある傾向はないので、鹿児島県内では縄文時代中期以降の人骨の埋葬の形は、仰臥屈葬が主であった可能性が高い。

ほとんどの場合は土坑墓と考えられるが、明確な土坑墓と報告のあるものは5例、埋葬人骨と報告されているものは1例である。これは、トレンチ調査が多いのことで、貝塚という特殊な環境のため遺構検出が困難を極めるためだと推測される。

散乱と報告されている人骨が3体（後期1、晩期1、不明1）あり、意図的なものか、後世の攪乱によるものか明確でない。

なお、九州縄文研究会の資料集等では、霧島市国分の平橋貝塚で、人骨1体の報告がある（前迫2002、2006）が今回は資料等を確認することができなかったため、記載していない。

また、伊仙町面縄貝塚では面縄第1貝塚1トレンチから貝塚時代前5期（晩期末から弥生時代前期）の箱式石棺墓に、仰臥伸展葬で老年女性の人骨が出土している。仲原式後続土器が供献品されているため、弥生時代早期・前期併行と考えられる。また、Cトレンチ東側IV層から、頭蓋骨が出土している。壮年の男性とされ、BP2,700前後の放射性炭素年代が出ており、弥生時代早期・前期併行と考えられる。そのため、面縄貝塚出土の人骨は本稿では記載していない。

以上、鹿児島県内縄文時代人骨の調査状況を概観してきたが、先行研究等とほぼ同様の結果となっている。県内の事例を集成した本稿が様々な方々に読まれ、活用されれば幸いである。

本稿の資料をまとめるにあたり、前迫亮一氏・上床真氏には助言や資料提供をいただいた、感謝いたします。

註1：人骨が何処に保管されているかという事を主な目的として作成しているが、保管場所が不明の資料が多いとしている。

註2：垂水市教育委員会2005に平成9・10年度の調査

で、保存状態不良の人骨2体を確認とあり。保存状態不良の2体のうち、1体は③1997-1号人骨として本稿に記載した。もう1体は、記載は不明のため、本稿では記載していない。

註3・4：土坑墓計測値は、垂水市教育委員会1999に記載はなく、垂水市教育委員会2005の総括に記載があり。

【引用・参考文献】

研究史・遺跡ごとに引用・参考文献を記載する。

○ 研究史

九州縄文研究会2002「九州の縄文墓制」第12回九州縄文研究会長崎県島原大会資料集

河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会1981『河口貞徳先生古稀記念著作集』

大保秀樹2020『出水貝塚』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(201)

内藤芳篤1984「南西諸島における古代人骨の人類学的調査研究-市来縄文人骨よりの考察-」『鹿大考古』第2号

内藤芳篤・石田肇・小片丘彦1984「鹿児島県出土人骨一覧」『鹿大考古』第2号

中橋孝博2011「鹿児島県種子島・一陣長崎鼻遺跡出土の縄文時代晩期人骨」『一陣長崎鼻遺跡』南種町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)

藤尾慎一郎・木下尚子・坂本稔・瀧上舞・篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・竹中正巳2021「九州南部～奄美群島出土人骨の年代調査とDNA分析」『鹿児島考古』第50号鹿児島県考古学会

前迫亮一2002「鹿児島県の縄文墓制」『第12回九州縄文研究会長崎県島原大会資料集』

2006「先史古代の鹿児島-通史編-」鹿児島県教育委員会

○ 江内貝塚

出水市郷土史1968出水市郷土誌編集委員会 p65～p68
池水寛治1965「鹿児島県出水郡江内貝塚」『日本考古学年報』14日本考古学協会

小片保1965「鹿児島県出水郡江内貝塚人骨概要」『日本考古学年報』14日本考古学協会

○ 出水貝塚

出水市郷土史1968出水市郷土誌編集委員会 p58～p64
出水市教育委員会2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2020『出水貝塚』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(201)

大森浅吉・松野茂・大森勲・甲原築磨・竹之下克己・林治茂1960「薩摩国出水貝塚(昭和29年)の人骨について」『鹿児島醫學雑誌』第33巻第3号鹿児島県医学会

河口貞徳1963「鹿児島県出水市出水貝塚」『日本考古学年報』6日本考古学協会

1986「出水貝塚あれこれ」『鹿児島考古』第20号鹿児島県考古学会

長谷部言人1921「出水貝塚の貝殻獣骨及び人骨」『京都帝國大學文學部考古學研究所報告』第六冊

○ 麦之浦貝塚

川内市教育委員会1987「麦之浦貝塚」川内市土地開発公社

小片丘彦・川路則友・佐熊正史・峰和治・山本美代子・岡元満子1987「川内市麦之浦貝塚出土の人骨」『麦之浦貝塚』川内市土地開発公社 p293～p309

○ 市来貝塚

市来町教育委員会1991『川上(市来)貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

鹿児島県立埋蔵文化財センター2023『市来貝塚(川上貝塚)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(218)

河口貞徳1988「薩摩半島西岸域の遺跡 市来貝塚」『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社

2005「出水貝塚」『先史古代の鹿児島』鹿児島県教育委員会

清野賢次1928「薩摩國日置郡西市来村大字川上字宮の後貝塚」『日本旧石器時代人研究』岡書院

小片丘彦・竹中正巳・佐藤正史1991「鹿児島県市来町川上貝塚出土の人骨」『川上(市来)貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) p115～p117

田幡丈夫1930「薩摩國日置郡西市来村大字川上字宮の後貝塚人人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』45日本人類学会

○ 黒川洞穴

河口貞徳1952「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会

1967「鹿児島県黒川洞穴」『日本の洞穴遺跡』

日本考古学協会洞穴遺跡特別委員会 平凡社

1967「黒川洞穴」『考古学ジャーナル』第13号ニュー・サイエンス社

○ 草野貝塚

鹿児島市教育委員会1983『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

1988『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

小片丘彦・峰和治1988「草野貝塚出土の前頭骨片」『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

○ 上焼田遺跡

鹿児島県教育委員会1977『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(5)

内藤芳篤・坂田邦洋1977「上焼田遺跡出土の人骨所見」『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

○ 大渡遺跡

指宿市誌1985指宿市役所総務課市誌編さん室

国分直一1955「指宿市大渡遺跡試掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号鹿児島県考古学会

国分直一・河口貞徳・河野治雄・重久十郎1958「鹿児島県指宿市大渡遺跡」『日本考古学年報10』日本考古学協会

○ 前田遺跡

始良市教育委員会2023『前田遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

○ 柁原貝塚

垂水市教育委員会1996『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

1999『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2005『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

峰和治・竹中正巳・小片丘彦1996「垂水市柁原貝塚出土の縄文時代人骨」『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 第V章

峰和治・竹中正巳・小片丘彦1999「垂水市柁原貝塚出土の縄文時代人骨-平成9年度調査-」『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

竹中正巳2005「垂水市柁原貝塚出土の縄文時代人骨-2002-1号人骨-」『柁原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

○ 大泊貝塚

鹿児島県教育委員会1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(25)

国分直一1963「鹿児島県肝属郡佐多町大泊遺跡」『日本考古学年報』6 日本考古学協会

○ 一陣長崎鼻遺跡

南種子町教育委員会2011「一陣長崎鼻遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』(17)

金関丈夫1958「種子島長崎鼻遺跡出土人骨に見られる下顎中切歯の水平研脳例」『九州考古学』第3・4号九州考古学会

竹中正巳2011「種子島一陣長崎鼻遺跡出土の人骨-2009年出土人骨-「一陣長崎鼻遺跡」南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)p60

中橋孝博2011「鹿児島県種子島・一陣長崎鼻遺跡出土の縄文時代晩期人骨」『一陣長崎鼻遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)p50～p59

盛園筒孝 1956「人骨を出土せる長崎鼻(南種子村中之下)遺跡について」『ちくら』第12号 ちくら編集部
1968「種子島における古代の埋葬(その一)」

『種子島民俗』第18号 種子島科学同好会

※盛園氏1956・1968は1次資料を確認できなかったため、盛園氏の引用・参考箇所は、南種子町教育委員会2011による。

○ 下山田Ⅱ遺跡

鹿児島県教育委員会1988『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル

墓』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(45)

小片丘彦・峰和治・川路則友・山本美代子「鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨」『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(45)

○ 長浜金久遺跡

鹿児島県教育委員会1984『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書31

1985『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32

1987『長浜金久遺跡(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42

松下孝幸1985「4.鹿児島県笠利町長浜金久遺跡出土の人骨」『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

○ 下原洞穴遺跡

天城町教育委員会2020『下原洞穴遺跡・コウモリイヨ一遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

竹中正巳2020「徳之島下原洞穴遺跡出土人骨概報」『下原洞穴遺跡・コウモリイヨ一遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)第3節

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞2021「鹿児島県徳之島所在遺跡出土人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集

○ 中甫洞穴

知名町教育委員会1984『中甫洞穴(1)』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書

松下孝幸1984「中甫洞穴出土の人骨」『中甫洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書

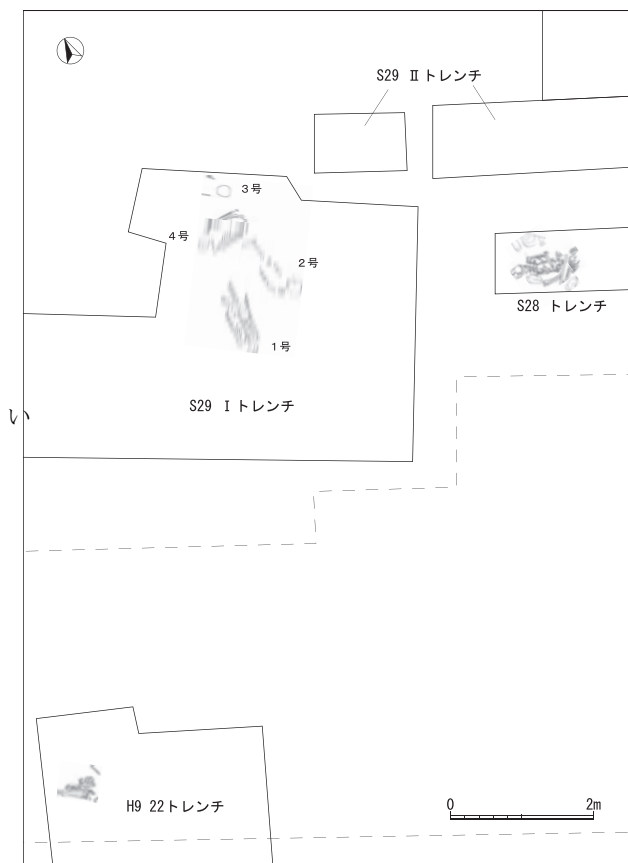
○ 神野貝塚

鹿児島大学法文学部考古学研究室1984『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』

小片丘彦・川路則友1984「神野貝塚出土人骨」『南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究』

各遺跡図及び図版(番号は本稿遺跡番号及び一覧表と同一)

(2) 出水貝塚



出水貝塚出土人骨位置図(スケール任意)
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)

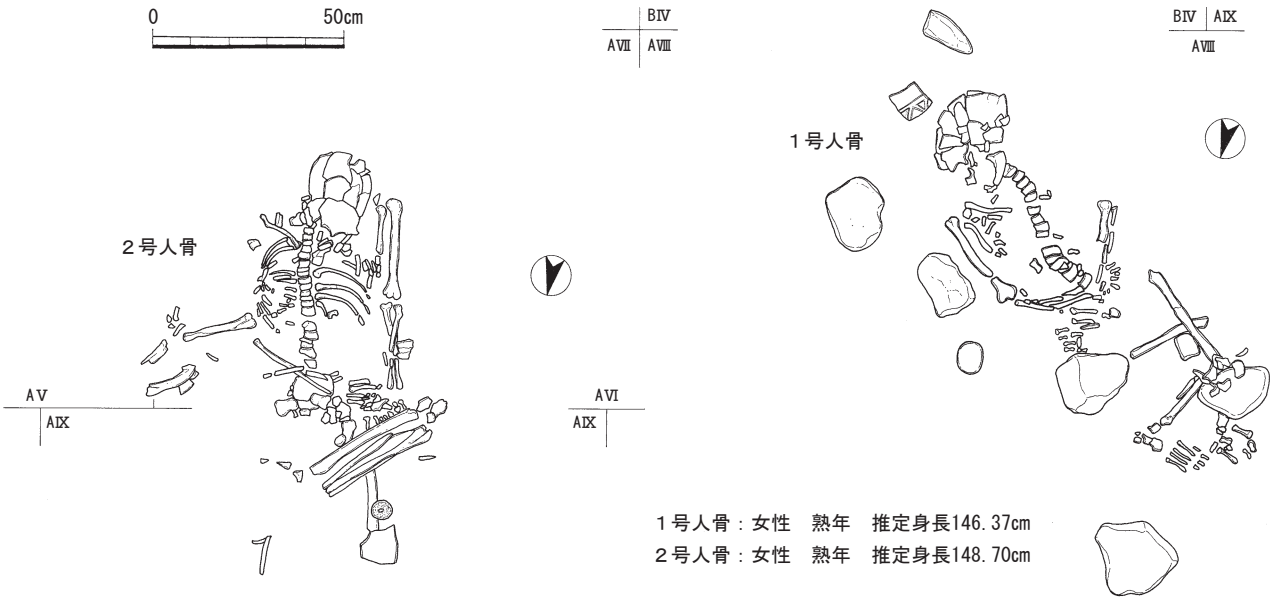


1954年人骨出土状況
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)



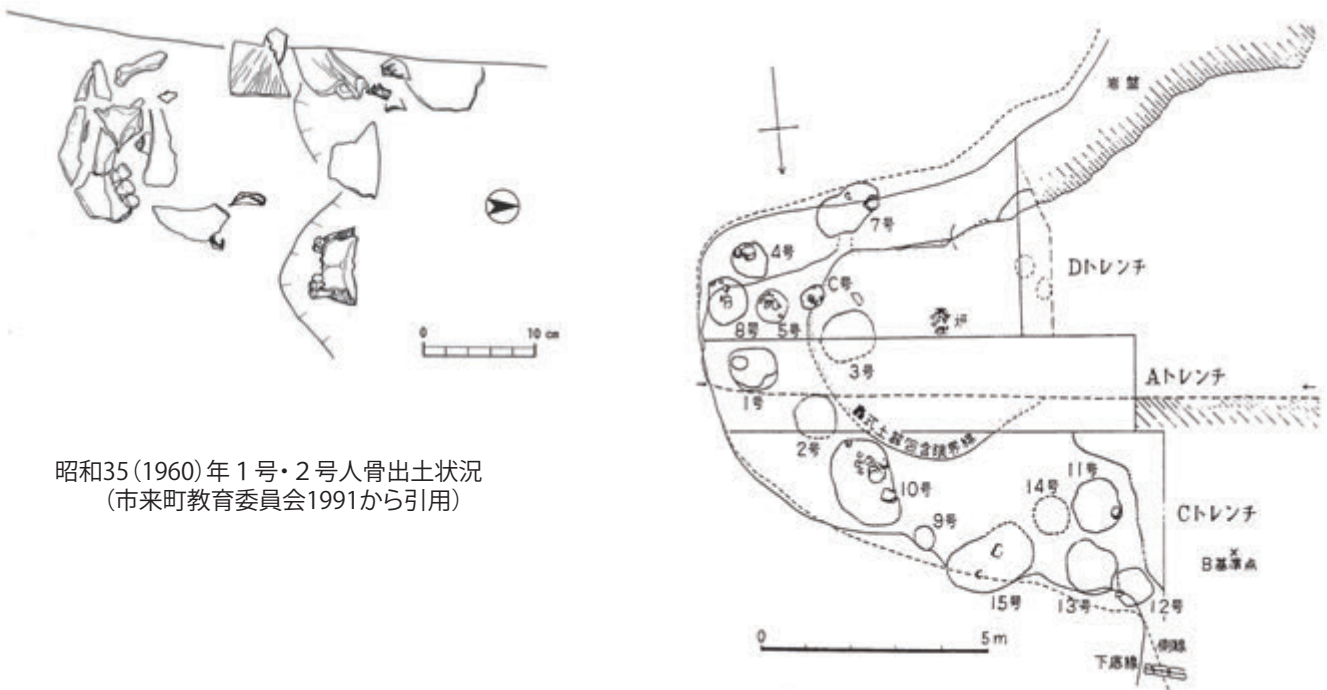
1953年人骨出土状況
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2020から引用)

(4) 市来貝塚



昭和35(1960)年1号・2号人骨出土状況
(鹿児島県立埋蔵文化財センター2023から引用)

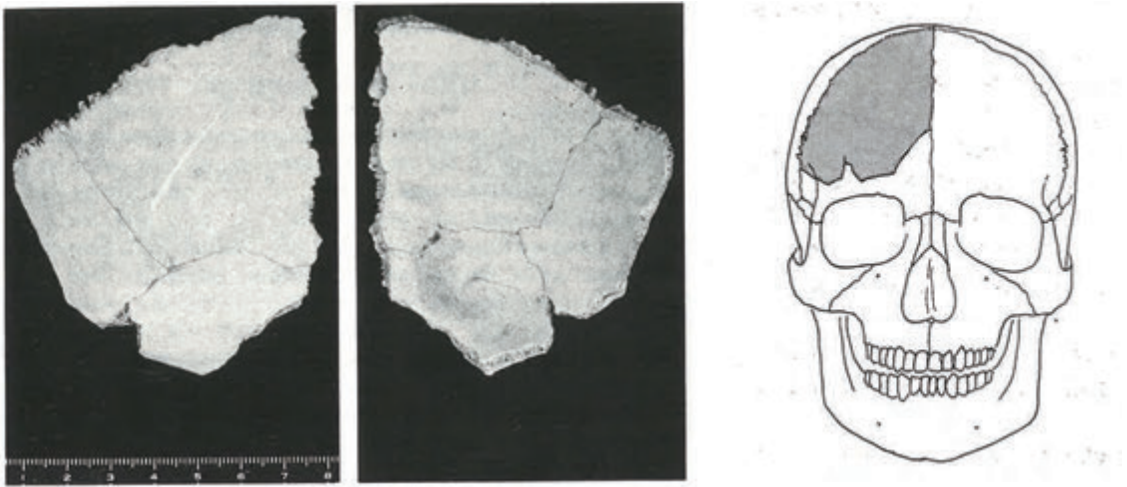
(5) 黒川洞穴



昭和35(1960)年1号・2号人骨出土状況
(市来町教育委員会1991から引用)

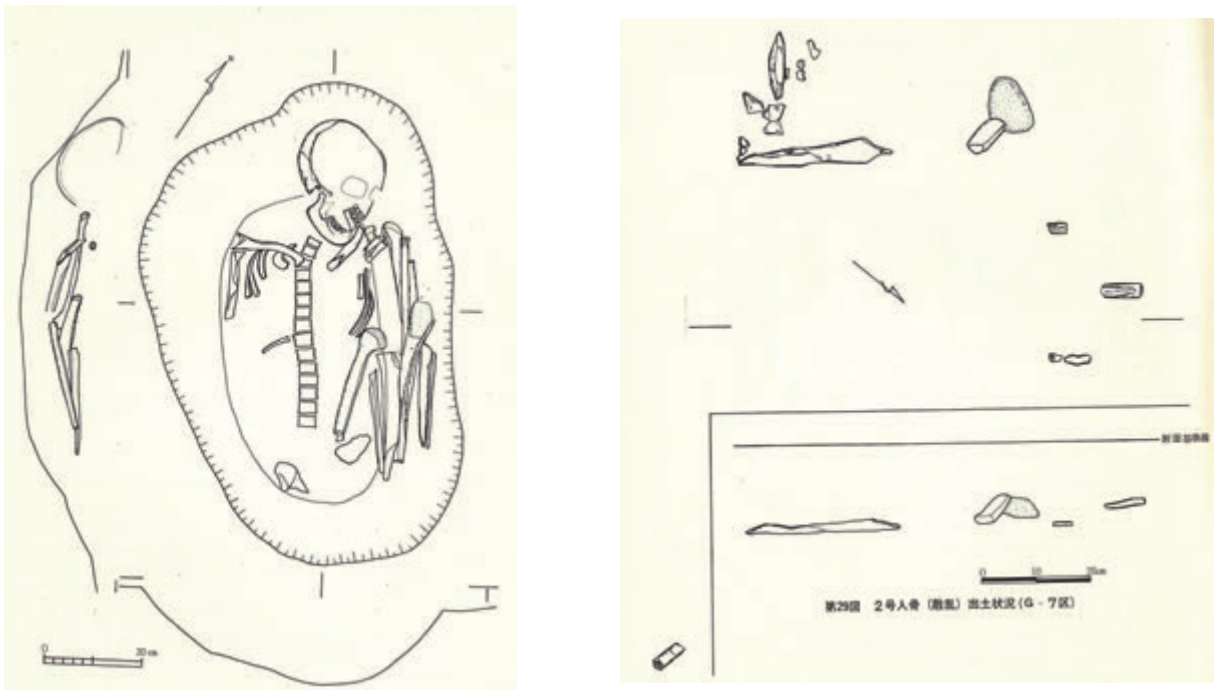
東洞穴平面図と断面図
(河口貞徳先生古希記念著作集刊行会1981から引用)

(6) 草野貝塚



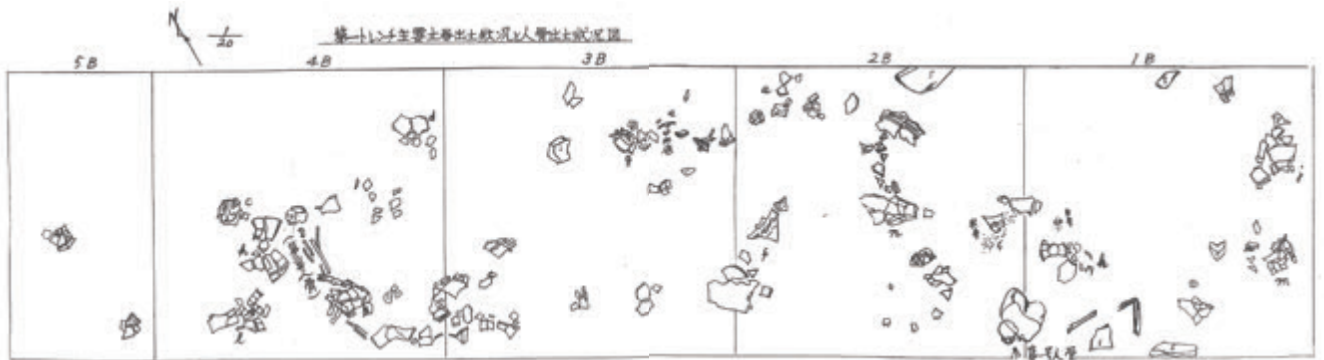
草野貝塚前頭骨片と残存部位
(鹿児島市教育委員会1988から引用)

(7) 上焼田遺跡



左:土坑墓1号人骨 右:2号人骨
(鹿児島県教育委員会1977から引用)

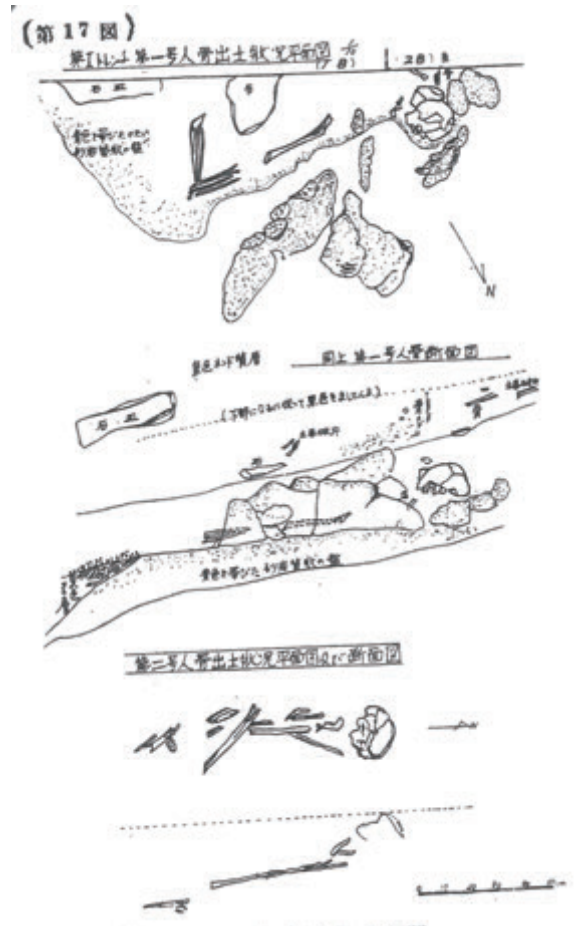
(8)大渡遺跡



大渡遺跡第一トレンチ出土状況
(指宿市誌1958から引用)



大渡遺跡 トレンチ位置図
(国分直一・河口貞徳・河野治雄・重久十郎1958から引用)

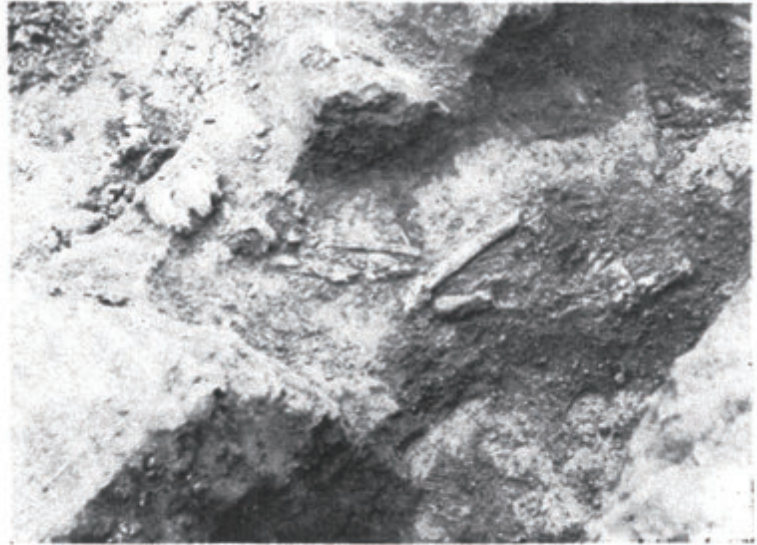


上:第一号人骨出土状況図
下:第二号人骨出土状況図
(指宿市誌1958から引用)

(8)大渡遺跡



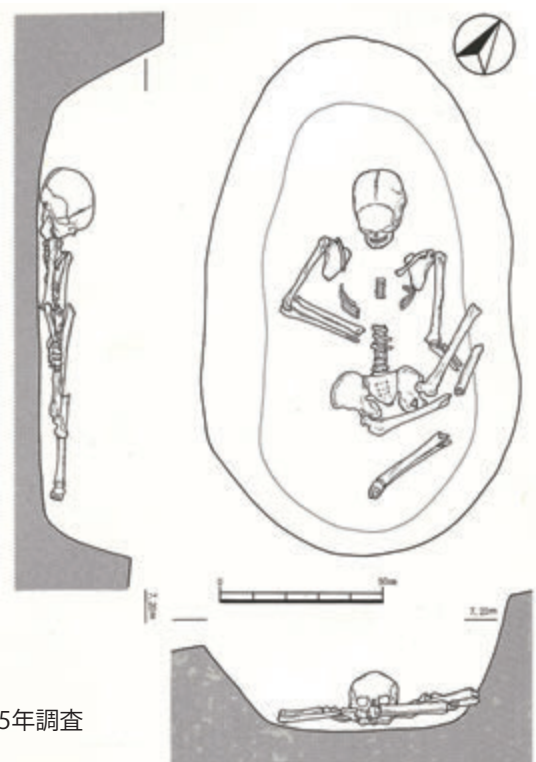
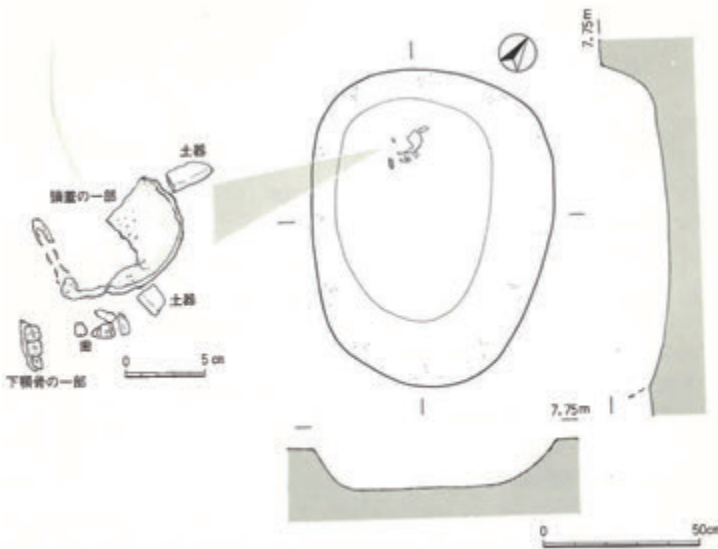
6 第一号人骨



5 第二号人骨

左:第一人骨出土状況 右:第二人骨出土状況
(指宿市誌1958から引用)

(10)柁原貝塚



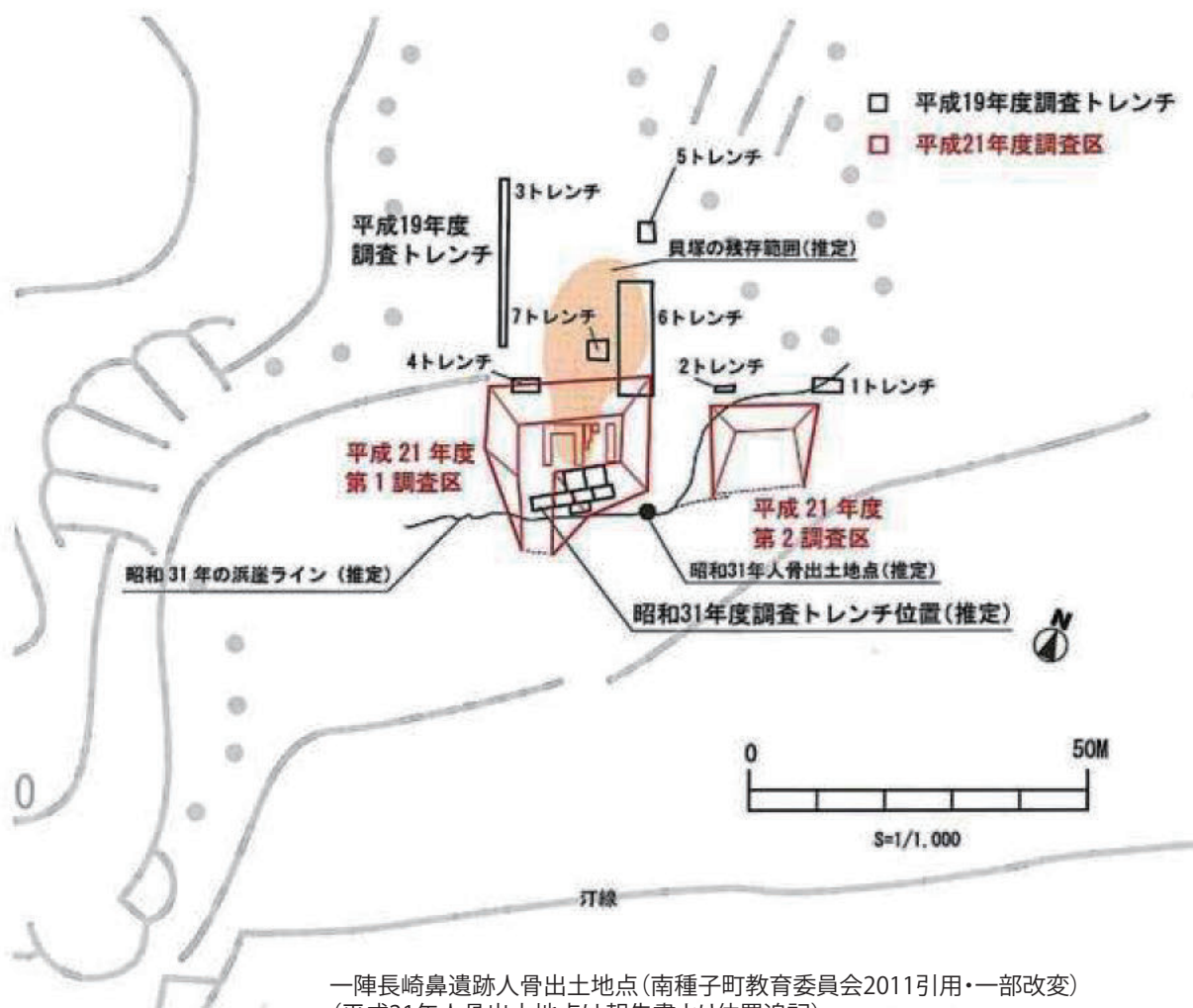
左:1号土抗墓1995年調査 右:2号土抗墓1995年調査
(垂水市教育委員会1996から引用)

(10) 柁原貝塚



左: 3号土抗墓(1997-2号人骨)
 右: 4号土抗墓(1997-3号人骨)
 (垂水市教育委員会1999から引用)

(12) 一陣長崎鼻遺跡



一陣長崎鼻遺跡人骨出土地点(南種子町教育委員会2011引用・一部改変)
 (平成21年人骨出土地点は報告書より位置追記)

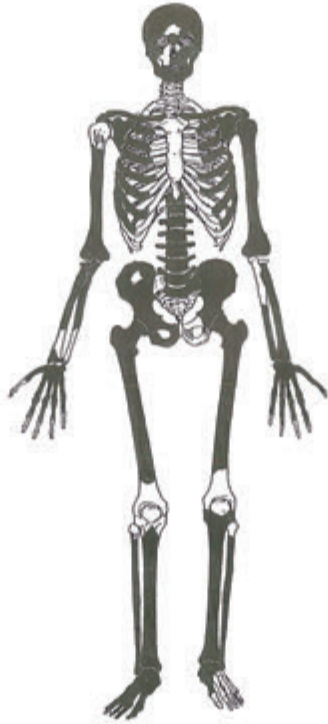


図1 人骨遺存部

- 17 -

一陣長崎鼻遺跡昭和31年人骨残存状況
(南種子町教育委員会2011引用・一部改変)

(13) 下山田II遺跡



下顎骨A上面観



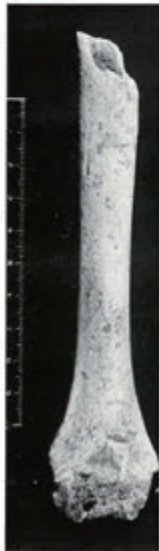
下顎骨B上面観



下顎骨A左側面観



下顎骨A同側中切歯の風習抜歯疑い



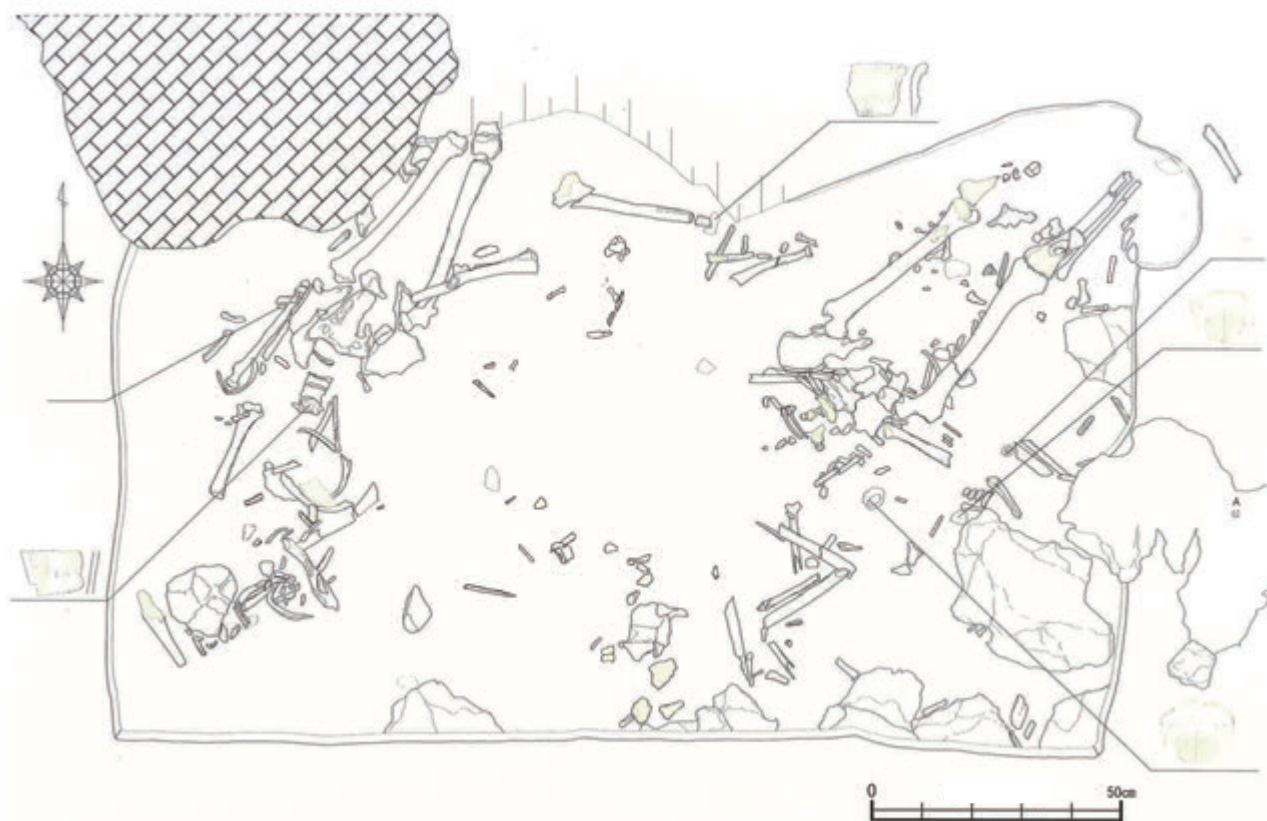
左上胸骨片 (女性・成人)



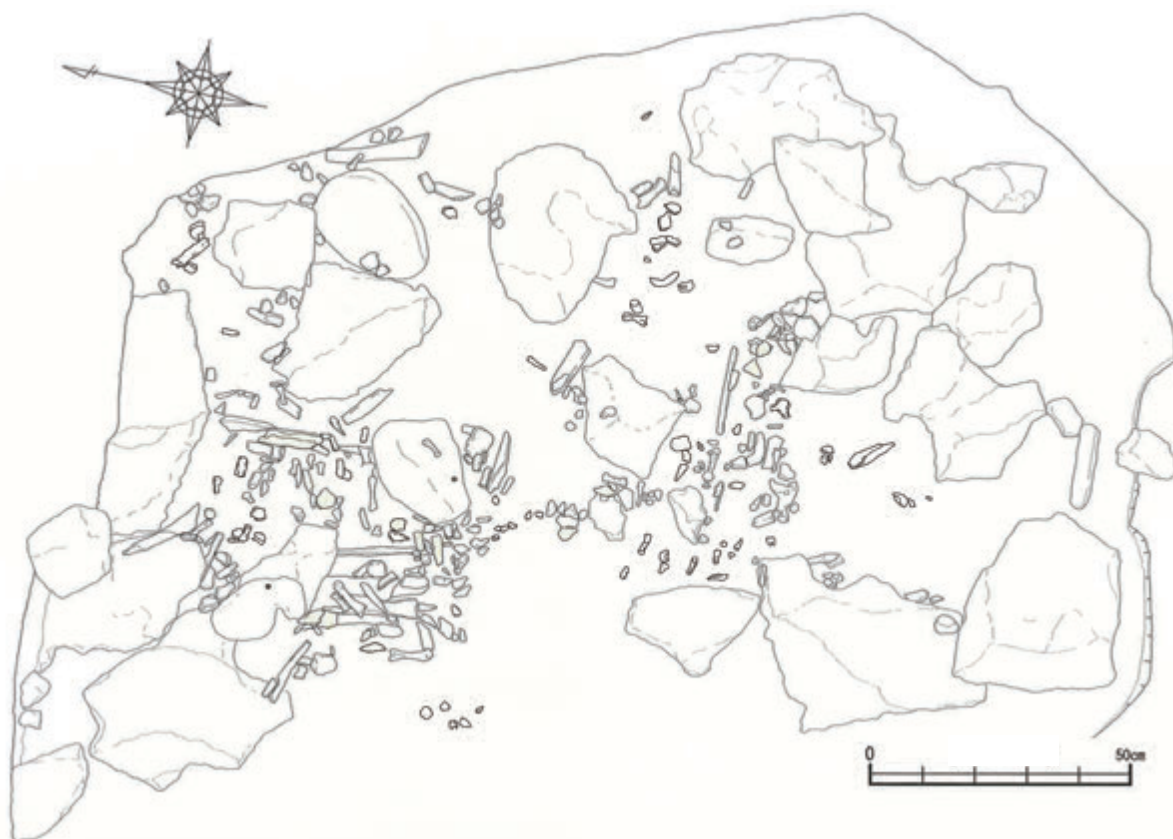
右大臑骨片 (男性・成人)

下山田II遺跡
(鹿児島県教育委員会1988から引用)

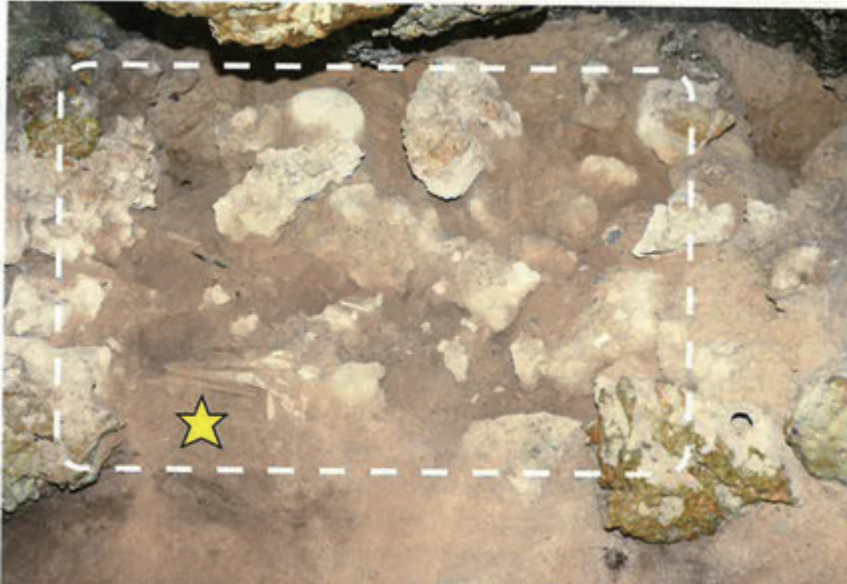
(15) 下原洞穴遺跡



下原洞穴遺跡 トレンチ 2 墓跡01
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ 1 墓跡02
(天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ 1 墓跡02
 埋葬跡:点線内 ★:下腿骨
 (天城町教育委員会2020から引用一部改変)



下原洞穴遺跡 トレンチ 2 墓跡01
 左: 2号壮年男性人骨 右: 1号壮年女性人骨
 (天城町教育委員会2020から引用一部改変)

(16)中甫洞穴



中甫洞穴 人骨出土状況
 (知名町教育委員会1984から引用一部改変)

鹿児島県 縄文時代の人骨出土遺跡 一覧表

NO	遺跡名	所在地 市町村	人骨名	性別	年齢	出土部位	推定身長等(cm)	調査年	時期			出土状況	頭位	抜歯	土器型式	備考		
									縄文時代 早期	前期	中期後期晩期							
1	江内貝塚	出水市	1号人骨	男性	老年	—	—	昭和36(1961)年	—	—	—	—	—	—	阿高式土器	半環状配石遺構		
			2号人骨	女性	壮年期	—	—	—	昭和36(1961)年	—	—	—	—	—	—	阿高式土器	半環状配石遺構	
			3号人骨	男性	壮年期終わりから熟年期	—	—	—	昭和36(1961)年	—	—	—	—	—	—	阿高式土器		
2	出水貝塚	出水市	大正9(1920)年 人骨	—	—	人骨片11点	—	大正9(1920)年	—	—	—	—	—	—	不明			
			昭和28(1953)年 人骨	男性	—	全身骨格	—	昭和28(1953)年	—	—	—	—	北西	—	—	阿高式土器		
			昭和29(1954)年 1号人骨	男性	—	全身骨格	ピアソン式149.36cm	昭和29(1954)年	—	—	—	—	南東	—	—	阿高式土器		
			昭和29(1954)年 2号人骨	女性	—	全身骨格	不明	昭和29(1954)年	—	—	—	—	南東	—	—	阿高式土器		
			昭和29(1954)年 3号人骨	男性	—	頭骨	—	昭和29(1954)年	—	—	—	—	南東	—	—	—	阿高式土器	
			昭和29(1954)年 4号人骨	女性	熟年	全身骨格	ピアソン式143.50cm	昭和29(1954)年	—	—	—	—	西	なし	—	—	阿高式土器	
			平成9(1997)年 人骨	男性	壮年後半～熟年前半 (30～50歳)	腰骨以下の下肢骨	ピアソン式157.20cm 藤井式 154.20cm	平成9(1997)年	—	—	—	—	北	—	—	南福寺式土器		
3	妻之浦貝塚	薩摩川内市	縄文人骨	女性	壮年	全身骨格	石上腕骨最大長から ピアソン式139.8cm・ 藤井式140.3cm 右尺骨最大長から 藤井式 146.1cm	昭和58(1983)年	—	—	—	—	—	—	市来式土器か			
			散在人骨1	男性	成人	右橈骨	—	昭和58(1983)年	—	—	—	—	—	—	—	市来式土器か		
			散在人骨2	男性	成人	右大腿骨	—	昭和58(1983)年	—	—	—	—	—	—	—	市来式土器か		
4	市来(川上)貝塚	いちき串木野市	散在人骨3	女性	成人	左右脛骨	—	昭和58(1983)年	—	—	—	—	—	—	市来式土器か			
			大正15(1926)人骨 1号人骨	—	—	脛骨1片・尺骨1片 全身骨格	ピアソン式148.70cm	大正15(1926)年	—	—	—	—	—	—	市来式土器	—		
			大正15(1926)人骨 2号人骨	女性	熟年	全身骨格	ピアソン式146.37cm	昭和36(1961)年	—	—	—	—	東南	なし	—	市来式土器	配石	
			大正15(1926)人骨 3号人骨	女性	熟年	全身骨格	ピアソン式163.46cm	昭和36(1961)年	—	—	—	—	南	なし	—	市来式土器	円形硬石製品	
			平成2(1990)人骨	女性	壮年	頭蓋骨・肋骨片	—	平成2(1990)年	—	—	—	—	南	なし	—	市来式土器又は 指指式土器	出水式土器・指指式土器・ 市来式土器・鹿洲細文系 松山式土器	
			3号土坑人骨	女性	熟年	頭部・胸部・尾椎	—	昭和27(1952)	—	—	—	—	西	—	—	黒川式土器		
5	黒川洞穴	日置市	前頭骨片	女性?	壮年前期	前頭骨片1点	—	昭和56(1981)年	—	—	—	—	—	—	指指市土器～市来式土器可能性			
			土坑墓-1号人骨- 2号人骨	男性	熟年	全身骨格	ピアソン式150.52cm 藤井式151.02cm	昭和50(1975)年	—	—	—	北西	あり	—	—	黒川式土器		
6	大蔵遺跡	指指市	1号人骨	—	—	頭蓋骨・脛骨・肋骨	—	昭和32(1957)	—	—	—	—	—	—	黒川式土器	備文 指指市土器の出土～ 市来式土器可能性		
			2号人骨	—	—	—	—	昭和32(1957)	—	—	—	北	—	—	—	指指市土器～ 市来式土器可能性		
7	上焼田遺跡	南さつま市	第3トレンチ人骨	—	—	頭蓋2	—	昭和32(1957)	—	—	—	—	—	—	指指市土器	指指市土器可能性		
			第3トレンチ人骨	—	—	—	—	昭和32(1957)	—	—	—	北	—	—	—	指指市土器	指指市土器可能性	

鹿児島県 縄文時代の人骨出土遺跡 一覧表

NO	遺跡名	所在地	人骨名	性別	年齢	出土部位	推定身長等 (cm)	調査年	時期				出土状況	頭位	抜歯	土器型式	備考
									縄文時代	前期	中期後期	晩期					
9	前田遺跡	市町村 始良市	人骨 1号土坑墓 (1995-1号人骨) 2号土坑墓 (1995-2号人骨)	— 男性 男性	— 壮年 壮年	指骨 頭蓋骨・下顎一部 全身骨格	— — ピアン式163.7cm 藤井式161.2cm	平成21 (2019) 平成22 (2020) 平成7 (1995)年 平成7 (1995)年	○ ○ ○ ○	IV層 土坑墓 土坑墓 土坑墓	— 北西 北西 北西	— — あり あり	— — 上加世田式土器 上加世田式土器	— — 外耳道骨腫 外耳道骨腫			
10	椋原良塚	垂水市	1997-1号人骨 3号土坑墓 (1997-2号人骨) 4号土坑墓 (1997-3号人骨)	— 女性 男性	壮年前半 壮年前半 壮年初期 (20~21歳)	頭蓋と体肢骨 全身骨格 全身骨格	— ピアン式49.5cm ピアン式161.0cm	平成9 (1997)年 平成9 (1997)年 平成9 (1997)年	○ ○ ○	土坑墓 土坑墓 土坑墓	不明 不明 不明	なし あり なし	不明 黒色磨研土 (三万田式・御禮式)か	— — 外耳道骨腫			
11	大泊良塚	南大隅町	2002-1号人骨 昭和28年人骨	女性 —	壮年 —	頭蓋骨 下肢・胸骨の一部	— —	平成14 (2002)年 昭和28 (1953)年	○ ○	27レンチから出土 伸展葬	不明 —	なし —	市来式土器 市来式土器・ 指宿市土器・ 市来式土器	外耳道骨腫 —			
12	一陣長崎鼻遺跡	南種子町	昭和31 (1956)人骨 平成21年 (2009) 乳幼児人骨 平成21年 (2009) 成人人骨	男性 — —	くは老年 (60歳以上) 選した 乳幼児 成人	全身骨格 頭蓋骨 頭蓋骨	ピアン式162.1cm 藤井式160.4cm — —	昭和31 (1956)年 平成21 (2009) 平成21 (2009)	○ ○ ○	屈葬の可能性が あり 貝・獣魚骨などの 自然遺物と混在 貝・獣魚骨などの 自然遺物と混在	不明 不明 不明	△ — —	黒川式土器 黒川式土器 黒川式土器	埋葬人骨の可能性 が高い			
13	下山田II遺跡	奄美市	下顎骨A 下顎骨B 上腕骨 大腿骨	女性 女性 男性	壮年 成人 成人	下顎骨 下顎骨 上腕骨 大腿骨	— — — —	昭和59 (1984)年 昭和59 (1984)年 昭和59 (1984)年 昭和59 (1984)年	○ ○ ○ ○	— — — —	— — — —	— — — —	嘉徳系土器 嘉徳系土器 嘉徳系土器 嘉徳系土器	— — — —			
14	長兵金久遺跡	奄美市	1トレンチ墓跡02 人骨 1トレンチ墓跡02 2体人骨	女性 — —	壮年 成人 成人	頭蓋骨の一部 下顎骨右半分 右脛骨・骨体部	— — —	昭和58 (1983)年 平成28 (2016)年 平成31 (2019)	○ ○ ○	散乱状態 1トレンチ墓跡02 1トレンチ墓跡02	— — —	— — —	— — —	— — —	生時化以降の指摘あり 埋骨管首飾り2個・貝		
15	下原洞穴遺跡	大島郡天城町	2トレンチ墓跡01 1号人骨 2トレンチ墓跡01 2号人骨 性別不明成人3体 未成人	女性 — 男性 —	壮年 壮年 成人 未成人	脛骨から骨盤 椎骨上腕骨・前腕骨・頭蓋骨 右大腿骨の骨体部 頭蓋底部	— — — —	平成28 (2016)年 平成31 (2019) 平成28 (2016)年 平成31 (2019) 平成28 (2016)年 平成31 (2019)	○ ○ ○ ○ ○ ○	伸展葬 伸展葬	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —	— — — —		
16	中甫洞穴	知名町	1983年1号人骨	女性	壮年	全身骨格	ピアン式147.08cm 藤井式142.48cm	昭和58 (1983)年	○	横臥埋葬	南東	なし	—	—	—	—	
17	神野良塚	知名町	神野良塚出土人骨	男性	壮年	頭蓋骨 四肢骨片	—	昭和58 (1983)年	○	散乱状態	—	—	—	—	—	—	



鹿児島県 縄文時代人骨出土遺跡位置図

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第17号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2024年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
